

# 追悼の言葉

小川 悟

和田さんは、年譜にも示されているように、天理外国語学校（現在の天理大学）から本学の独文学科に編入した。近畿大学を経て本学に赴任してきたが、その間フンボルト留学生として、西ドイツのフライブルク大学で研究に従事した。和田さんがドイツ語学に興味を抱くようになったのは、この留学が契機になったのであろうか。しかし、帰国後、和田さんはかなり長い間、文芸学の領域で研究すべきか、あるいは言語学の領域で研究すべきか悩んでいた。若い時に、日本独文学会でカフカの作品における色彩語の研究にかんする研究発表をされたが、言語にかんする関心はこの頃から芽生えていたのであろう。しかし一方では、カール・ヴィトリンガーの作品を翻訳し、劇団『明日』によって上演されたこともある。いくつかのドイツ語テキストの制作は、和田さんのドイツ語教授法の理念に基づくものであったが、これらは、彼の言語学的関心の所産でもあったといえよう。

天理外国語学校時代の恩師の一人が、ドイツ語学の服部正己教授であった。服部教授も今はもうないが、『ニーベルンゲンの厄難』の翻訳は、当時『コギト』同人であった服部正己の名を高からしめる業績であった。和田さんが服部教授から受けた影響は、非常に大きいものがある。それは、たんに学問的のみならず、日常生活の領域にも及ぶものであった。しかし彼の関心は、年を経るとともに言語学の領域の中で拡大していったが、同時にドイツ中世語に及んでいった。京都大学の石川名誉教授を中心とした中世語研究会には、入院されるまでは一日も欠かしたことがなかった。石川教授の人柄に惹かれるところも大きかったが、中世語にかんする関心はまことに大きいものがあった。

遅筆の人で、論文の作成には仲々時間をかけたようであるが、それも想いあふれて筆の運びが遅かったのであろうか。学位論文にはひそかに情熱を燃していたようであるが、それもついに実現することがなかった。よい仕事をしたという願望が強く、その願望故にしばしば神経質と思われる程研究には慎重であった。また、学生の教育にはことのほか熱心で、中世語のよき後継者をつくりたいという願望も激しいものであった。和田さんが、これらの願望を果たされずにいってしまったのは、まことに残念といわざるをえない。

しかし、和田さんのドイツ文学科に与えられた影響は、はかり難いものがある。ドイツ文学科の充実のためになされた氏の発言の数々は、それぞれ深い意味を持つものであった。時に理解され難いこともあったが（私ですら理解しないことがあった）、それは、和田さんの思惟が遙か先へ進んでいたからであろう。教室内では、人事委員やその他教室運営上の重要な役割を担っていた。私たちが和田さんに負うところは大きかったが、彼の肝臓に病巣ができていて、それが極めて重大なものであることに私たちは気付いていなかった。休暇を利用して入院されていたが、私たちは勿論のこと、御本人も病気の重大さには気付いていなかった。病床では、依然として新しい文献を読みふけり、見舞いにいくと、その印象を熱心に語っていたのを思い出す。

しかし、府立成人病センターに入院してからは、外見からは何の変化も見出されなかったが、内心期するところがあったのだろうか。後に夫人からお聞きしたことであるが、覚悟の程が日記に誌されていたということである。人間は時によって、仮定法的な発想で、しかも痛恨の想いをこめて過ぎた時に想いをはせることがあるが、もし和田さんが生きていたならば、愚かな非現実的な願望を抱くことがある。最後に、西ドイツ・ジューゲン大学のクロイツァー教授の和田さんの死に対する悲しみを伝えるものである。